

11：2,005

－なぜ富ノ沢(2)遺跡から土偶が大量に出土しなかったのか－

成田 滋彦（青森県埋蔵文化財調査センター）

1 はじめに

今回の論考を書くきっかけとなったのは、平成 23 年 7 月 9 日の東奥日報社の朝刊に三内丸山遺跡の遺物を整理中に、縄文時代中期榎林式期の土器片にシャーマン？（図 2－2）を描いた土器を発見したという記事であった。早速、三内丸山遺跡時遊館に行き実見し、その際に説明版に三内丸山遺跡から出土した土偶が 2,005 点（注 1）とあり、その場で考えてしまった。なぜ、自分が調査した六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡から土偶が 11 点しか出土しなかったのだろうか、もう一度、土偶以外の遺物を見直す必要が有るのではないかと考え、まとめたものである。そのため、

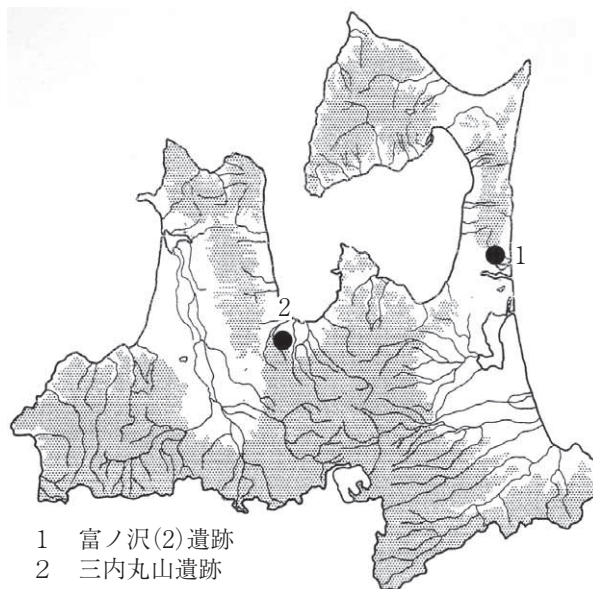


図 1 遺跡位置図

タイトルの 11：2,005 は土偶の数を表している。この二遺跡は青森県内に所在する縄文時代中期の拠点型集落（注 2）である（図 1）。青森市に位置する三内丸山遺跡は、沖館川流域の丘陵地に位置し、一方の富ノ沢(2)遺跡は六ヶ所村の尾駸沼北側の丘陵に位置する。この二遺跡は大量の遺構及び遺物が出土し遺跡の規模が類似しているため、今回はこの二遺跡を取り上げて、縄文時代中期の祭祀遺物で特に土器に装飾した装飾土器（注 3）について論考するものである。

2 若干の研究史

今回、論考する縄文時代中期の装飾土器について、青森県を中心として年度ごとに若干の研究史を記載する。

1960 年に江坂輝彌氏は『土偶』の本文中において、「顔面付土器・獣面把手・顔面把手」の三区分に分けて記載したが、本県では出土例が少なく、この種の遺物に対する研究は発展しなかった。

1974 年に野口義麿氏（野口 1974）は、石神遺跡から出土した土器に対して蛇身装飾として紹介している。蛇行文を蛇とすることの着眼点は当時としては注目される。

1978 年に青森県教育委員が調査を実施した青森市三内沢部遺跡で「足形土製品」（青森県 1978）が出土した。この足形土製品こと足形付土器については、渡辺誠氏（渡辺 2000）が注目して論考している。

1980 年に小山彦逸氏は平川市（平賀町）の堀合Ⅱ号遺跡から出土した深鉢形土器の文様を絵画として発表した（小山 1980）。本県では絵画の資料が少なく人体文付土器としては 1988 年に福田友之氏が石神遺跡の土器についてシャーマンの図ではないかと発表し（福田 1988）、昨年発表した三内丸

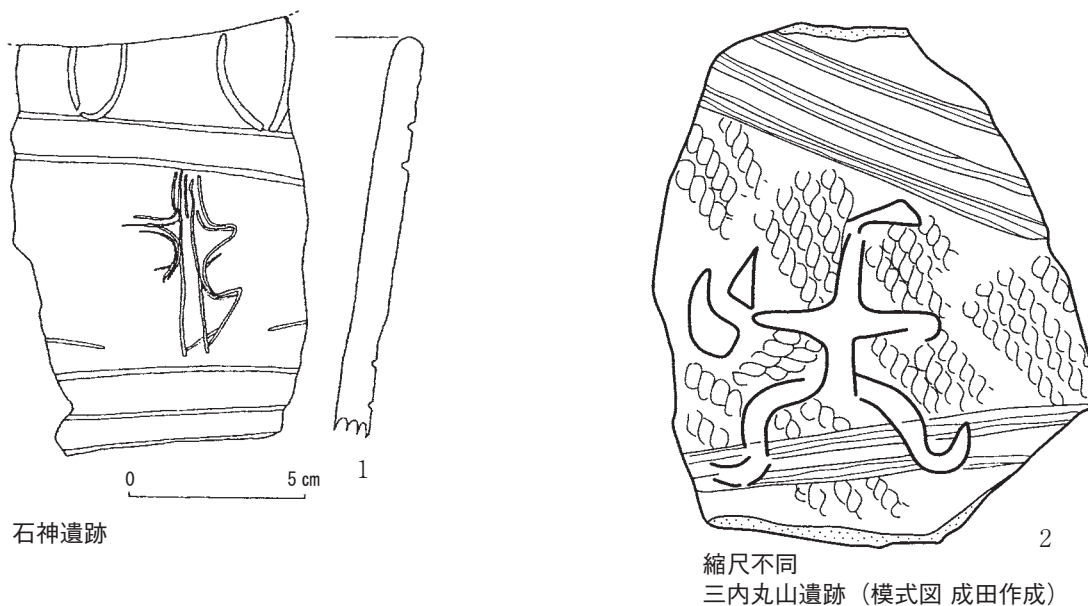


図2 人体文付土器

山遺跡のシャーマンより 20 年前に中期榎林式の人体文をシャーマンであると指摘した（図2-1）。

1984 年に八戸市葦窪遺跡の住居跡の床面から出土した「狩猟文土器（青森県 1984）」については、物語性を持つ土器であるとして、福田友之氏が狩猟文土器の解釈を『…埋葬用の土器があるいは葬送儀礼に関した祭器と考えている。狩猟文土器の絵画は死者があな世でもこの世と同じように豊かな狩猟生活を求めるという祈りを込めて絵がかれた…』（福田 1989）として葬制との関連を述べた。一方、斎野裕彦氏は狩猟文土器と人体文土器の関連から『…狩猟文土器は、人体文付土器Ⅲ類がかかわる儀礼行為の中で狩猟儀礼用に作られた祭器と位置づけられる…』（斎野 2006）という論考がみられる。

1991 年には、筆者が青森県の顔面付土器を集成し（成田 1991）、平山久夫氏が青森県石神遺跡の資料を用いて 1991 年と 1997 年に顔面付土器について紹介したが、顔面表現が抽象化したものが多かったため、なにをもって顔面とするのか、多くの研究者に理解されず、また顔面表現の抽象化を顔面と認識することに対する拒否反応もあり、研究の進展がみられなかったものである（平山 1991・1997）。

このようにみると、1984 年に発掘された葦窪遺跡の狩猟文土器が、本県の一つの契機となって、単品に対する研究は進むものの、それはあくまで、縄文時代後期の狩猟文土器だけの研究であり、総合的な研究は、進んでいないというのが本県の現状である。

3 装飾土器（人体文付土器・顔面付土器・足形付土器・蛇付土器）の定義

人体文付土器・顔面付土器・足形付土器・蛇付土器の定義を記載する。この 4 点は土器に装飾性をもつ土器であり、総称として装飾土器と呼称する。人体文（人体の全体を表現）・顔面（顔のみ表現）・足形（足を表現）については、人体の全体及び一部を表現しているものである。蛇付土器は、は虫類の蛇を表しているものであり、更に各土器について記載する。

人体文付土器（図3）

当該地域の人体文付土器は、人体のプロポーシオンを抽象化しており、全体の構図が人体を表現しているものを人体文付土器とする。土偶付土器と呼称されているものも、人体文付土器の範疇の中で

記載する。(注4)

顔面付土器 (図4～7)

顔面に関しては、顔面を忠実に描いているものと、抽象化している二種のタイプが存在し、この抽象化のタイプが主体を占める。目・鼻・口の三点を表しているものを顔面付土器とする。中部・関東地方で表現されている人面把手付土器及び顔面把手とは同じ意味であり、渡辺誠氏(渡辺1994)の人面装飾付土器と同義語である。なお、(14)は、口部が無いが顔面付土器に含めた。

足形付土器 (図8)

土器の口唇部寄りに足部をモチーフとして装飾しているものである。指部を表現しているものもあり、人体の足部と思われる。

蛇付土器 (図9・10)

蛇付土器は、野口義磨氏(野口1974)が青森県石神遺跡から出土した土器片を蛇身装飾のものとして紹介している文様を、ここでは蛇付土器とした。原則は器面に対して直行するものとし、口唇部上面に蛇行して貼り付けるもの及び器面に横位方向に施文しているものについては、現段階では蛇として理解できなかったため除外している。(注5)

以上のように各土器の定義を記載したが、筆者の定義に関して疑問を持つ研究者がいるだろう。理由は二つあると思う。第一点は表現方法が抽象化されている点である。このことは動物形土製品を見てもわかるように、四脚を有するものの種別を判断できないものが多い事は事実である。偶像・絵画に関してもリアリティーに欠けるものであり、その抽象化こそ縄文時代祭祀遺物の主流をなすものと考えられ縄文時代＝抽象化時代と表現していいだろう。第二点は出土量が多いという点である。非日常容器は少ないという考えがあるが、当該地域では土器に装飾性をもつものは日常容器で、器表面にスス状炭化物の付着が多くみられる。数量だけでは判断できないものであるし、精・粗の区分けができない時期であり、量的に大量に製作したと思われる。

4 出土状況について (表1・2)

遺物の出土状況からグラフで概観すると、(表1)は遺構内と遺構外の対比図であるが、三内丸山遺跡では、ほぼ同数に対して富ノ沢(2)遺跡では遺構内の数が多い。両遺跡を更に細かなグラフで概

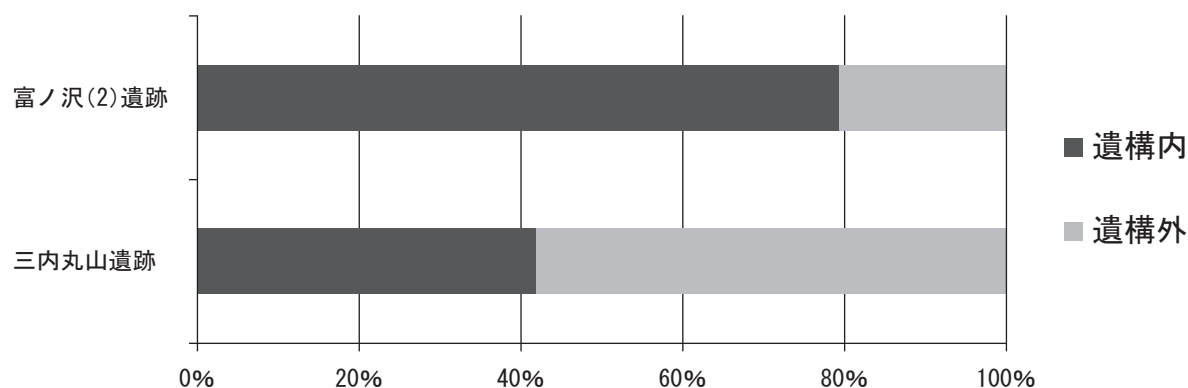


表1 遺構内外の割合

三内丸山遺跡 (23)					富ノ沢 (2) 遺跡 (56)				
	人体	顔面	足	蛇		人体	顔面	足	蛇
住居跡床面	1	2		1	住居跡床面	2	5		6
住居跡埋土		2			住居跡埋土	3	9	2	8
土坑埋土					土坑埋土	3	2		3
遺構外	2	7	1	4	遺構外	3	7	1	2
埋設土器		2		1	埋設土器				

表2 三内丸山遺跡・富ノ沢(2)遺跡出土個数

観すると、(表2) から三内丸山遺跡では埋設土器が3点用いられる事と、人体文付土器・顔面付土器が住居跡の床面から出土しているものの、土坑内から全く出土していない。一方、富ノ沢(2)遺跡では埋設土器はみられなかつたものの、土坑内から人体文付土器・顔面付土器・蛇付土器が出土し、住居跡内の床面、埋土からの出土が多いのが特徴といえる。

両遺跡ともに遺構内・遺構外からの出土がみられるものの、遺構内の使用にあつては使用差が指摘できるものである。

5 富ノ沢(2)遺跡と三内丸山遺跡の装飾土器概要

〈人体文付土器〉図3

富ノ沢(2)遺跡 (図3-1~10)

本遺跡から11点出土した。各型式毎に記載する。円筒上層c式は平口縁の深鉢形で文様区画帯の内部に十字型土偶のプロポーションで描いている(1)。円筒上層d式では(9)が頭部を中心として万歳形をしており、体部は一条の粘土紐で表現している。(4)は体部を二条で貼り付け足部を円形としている。円筒上層e式では、(8)が粘土紐を用い腕部を下げ体部は一条の粘土紐、足部を有脚形で表現している。(2・10)は土偶形態を表しており、(10)はくびれ部を有するプロポーション、(2)は有脚土偶のプロポーションと類似している。榎林式では(3・6)が円筒上層d式の系譜を持つもので、頭部及び腕部が万歳形で体部は直線で脚部は表現していない。(5)は頭部と腕部がいかり肩で手部を丸めている。体部は直線的で脚部は表現していないものである。

三内丸山遺跡 (図3-11~13)

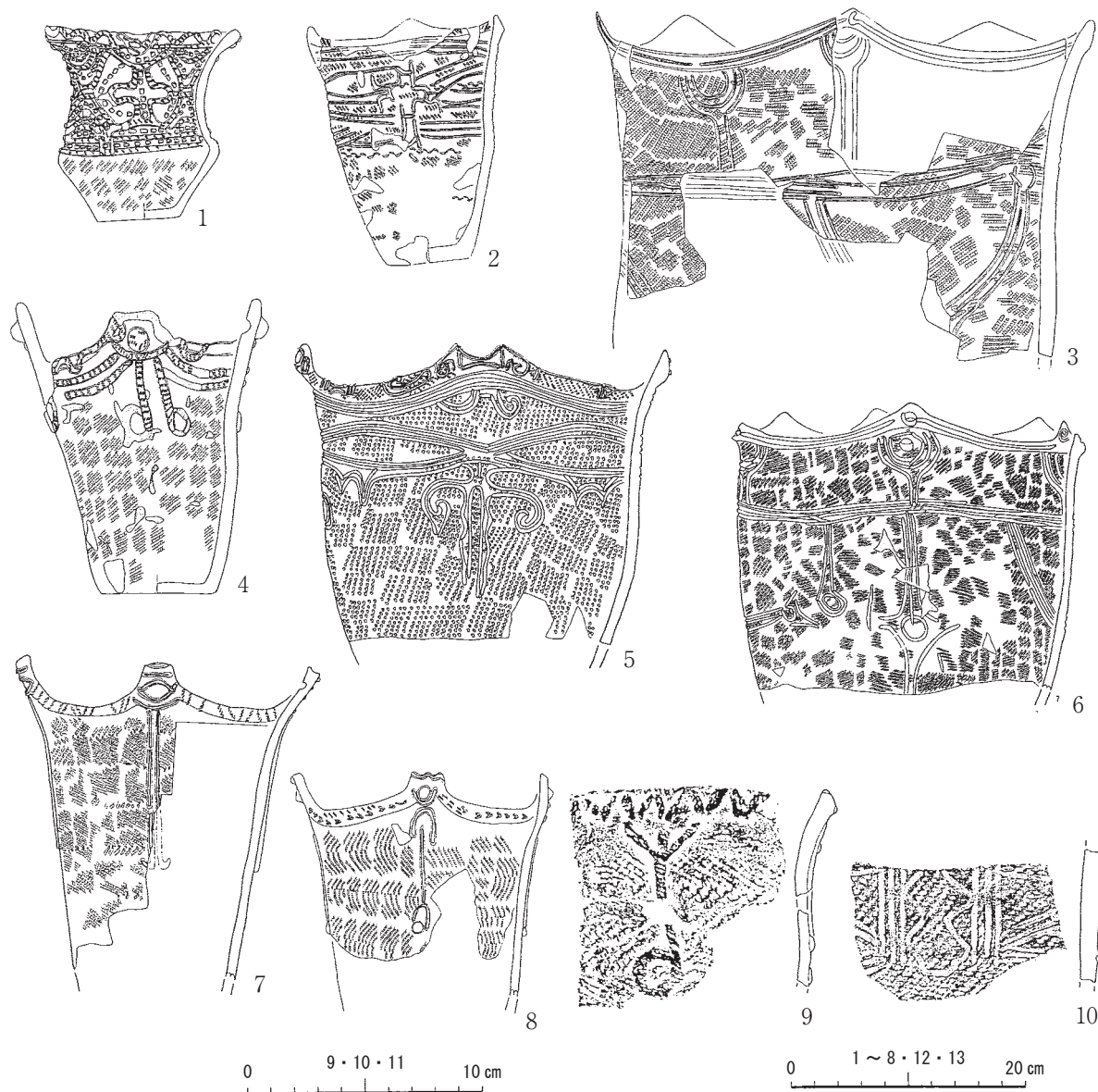
3点が出土した。(11)は胴部に土偶モチーフで描かれていると表現されているが、人体文付土器の範疇に入れる。(13)は頭部・腕部・体部を抽象化した人体文と理解する。(図2-2)はシャーマンといわれているが抽象化された文様の人物の特定は危険である。

〈顔面付土器〉図4~7

富ノ沢(2)遺跡 (図4-14~23・図5-24~38)

波状口縁の突起部に顔面を表現している。粘土紐を用いて目・口を貼りつけているものが主体を占める。(15・23)は撚糸圧痕・(14)は沈線を用いているが出土例は少ない。目は円形文・渦巻き文、鼻は円形文と三角形文で(18)は蛇行文で表現、口は弧状に施文している。頭頂部の目が突出した

富ノ沢(2)遺跡



三内丸山遺跡

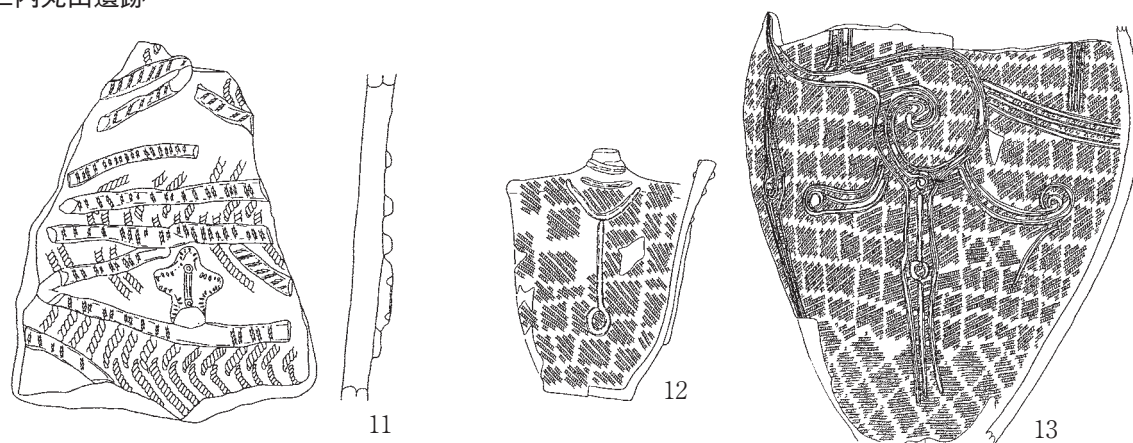


図3 人体文付土器

富ノ沢(2)遺跡

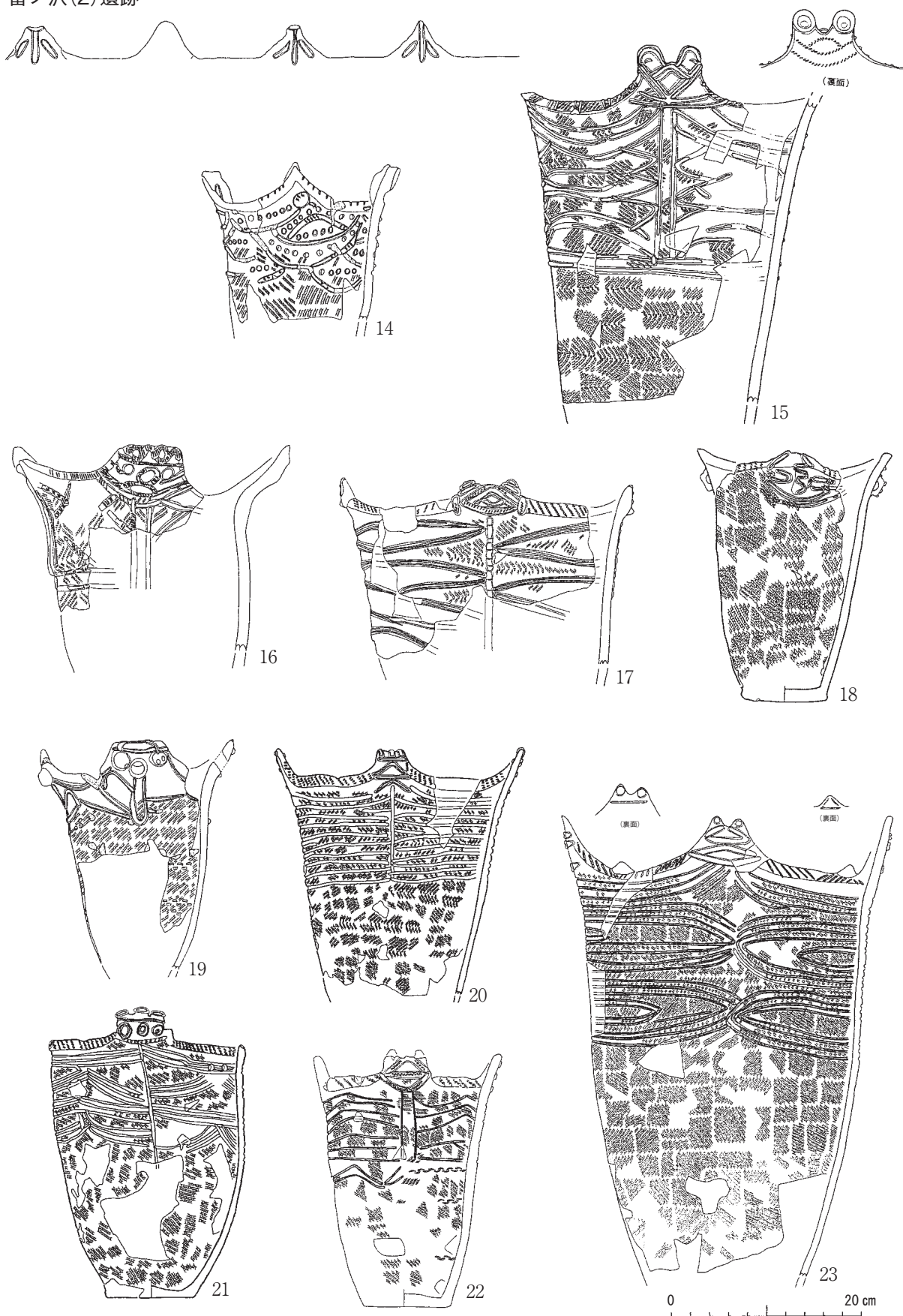


図4 顔面付土器(1)

富ノ沢(2)遺跡

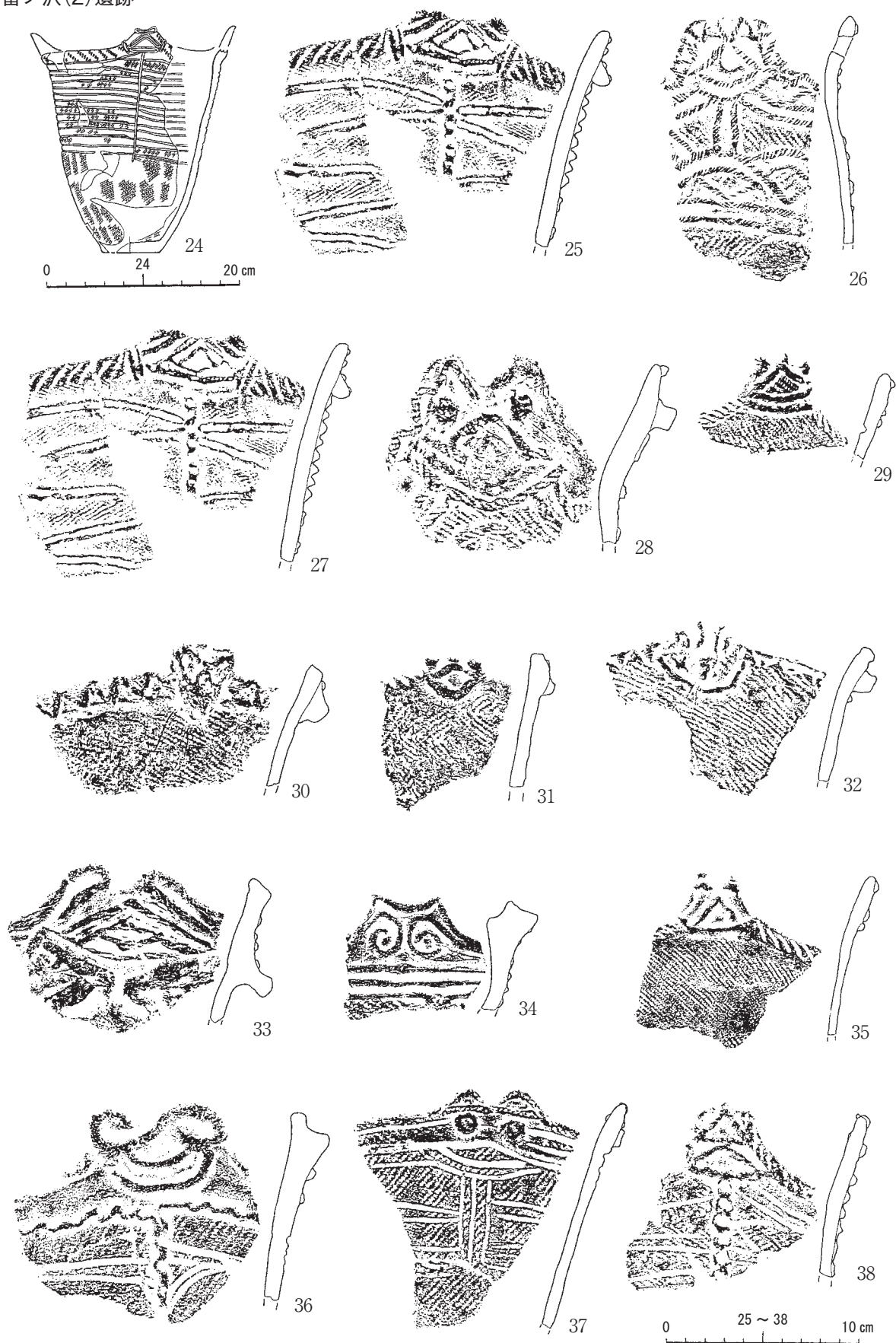


図5 顔面付土器 (2)

三内丸山遺跡

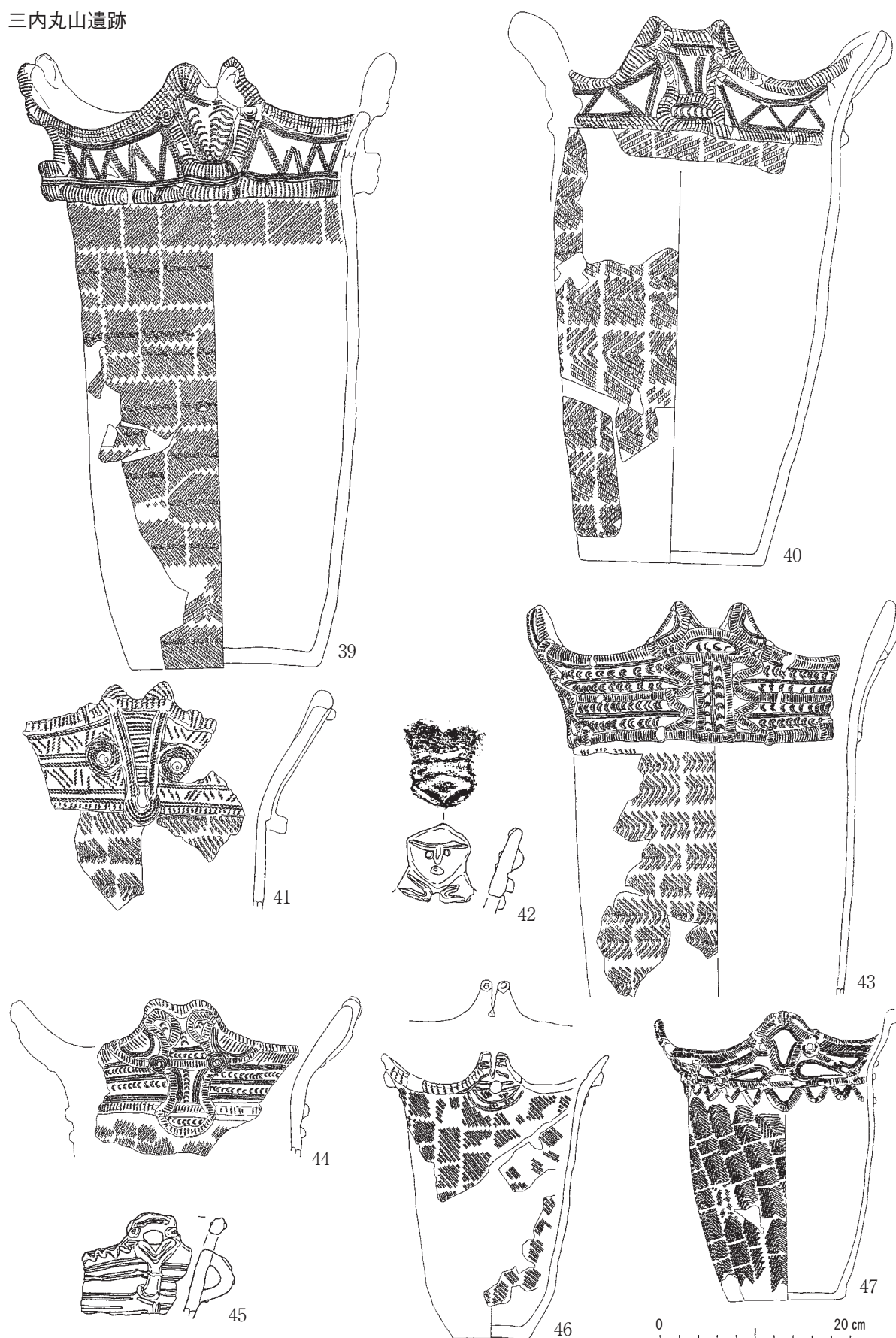


図6 顔面付土器 (3)

三内丸山遺跡



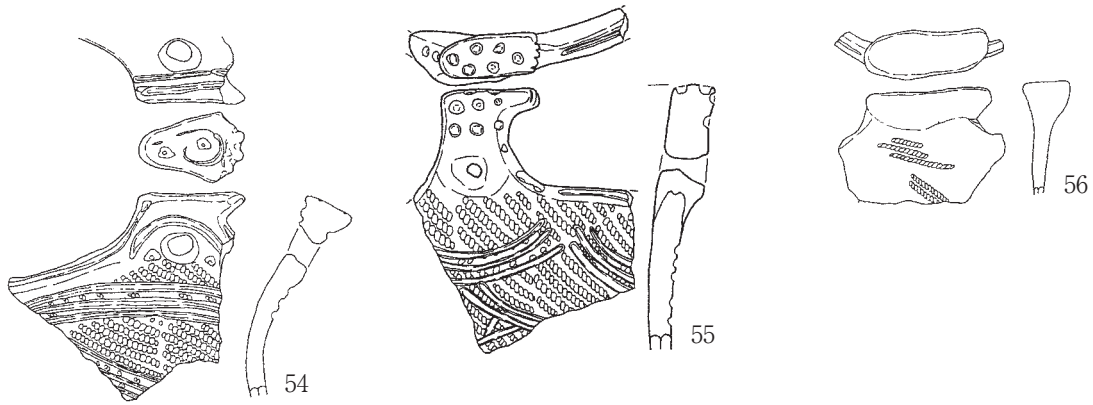
図7 顔面付土器（4）

二股状突起と頭頂部が平坦なものがみられる。

三内丸山遺跡（図6 - 39～47・図7 - 48～53）

本遺跡の顔面付土器は、各型式毎に記載する。円筒上層a式（39・40・41・50）深鉢形の波状口

富ノ沢(2)遺跡



三内丸山遺跡



図8 足形付土器

縁に顔面を施文しており、頭頂部は二股に分かれ粘土紐を用いて目・鼻・口を表現している。円筒上層 b 式 (43・44) は前段階の円筒上層 a 式と類似した文様構成である。円筒上層 d 式 (49・52・53) (49) は表裏面に顔面を表現している。土器の体部文様と同様な粘土紐（素文）を貼りつけている。円筒上層 e 式 (45・46・48) は波状口縁の波状部分に粘土紐を用いて顔面を表現しており、(46・48) は裏面にも顔面を施文している。

（足形付土器）図8 - 54 ~ 58

富ノ沢(2)遺跡（図8 - 54 ~ 56）

3点出土しており、すべて左足部である。土器の口縁突起部に装飾しており、(54・55) は指先部を表現している。(55) は刺突文。(56) は刺突文及び渦巻き文を施文している。(54・55) は榎林式期・(56) は最花式期である。

三内丸山遺跡（図8 - 57・58）

(57) は土器の口縁突起部に、指部は表現せずにかかと部分にかけて形態が細くなっている。左足部内側に縦位文様を施文しており、円筒上層 e 式である。

〈蛇付土器〉図9 - 59 ~ 76・図10 - 7 ~ 82

富ノ沢(2)遺跡（図9 - 59 ~ 76）

本遺跡の蛇付土器は、円筒上層 d 式と円筒上層 e 式に分けて記載する。円筒上層 d 式 (61) は1点のみの出土であり、波状口縁の垂下部に縦位方向に一条の粘土紐（素文）を貼り付けている。円筒上層 e 式 (67・73) は波状口縁の垂下部に施文され、粘土紐（素文）と沈線によって縦位方向に一

富ノ沢(2)遺跡

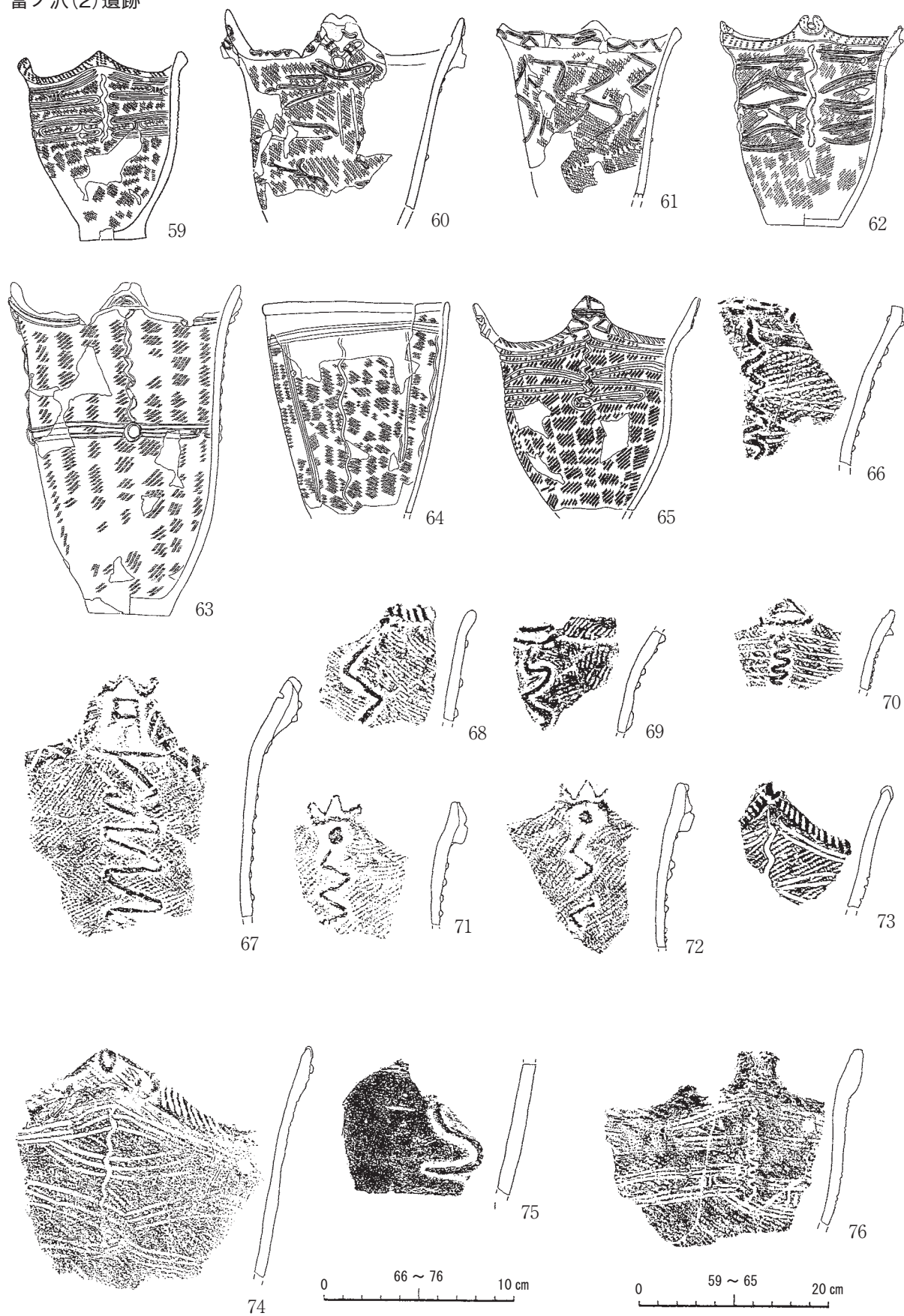


図9 蛇付土器(1)

三内丸山遺跡

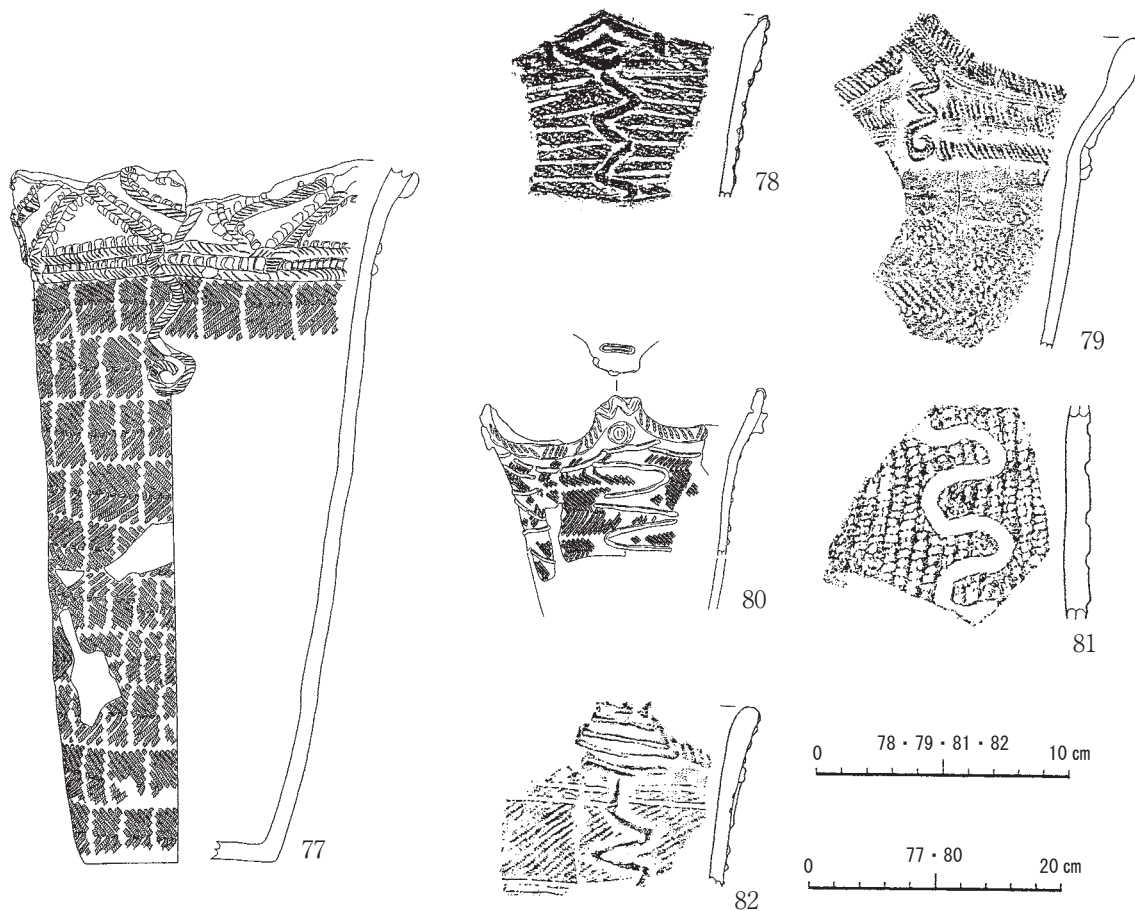


図10 蛇付土器 (2)

条施文されている。(72)は末端が丸みがあり、(69)は直線的に表現しており、蛇の頭部を表現しているものと思われる。

三内丸山遺跡 (図9 - 77 ~ 82)

本遺跡では各型式毎に記載する。円筒上層 a 式では波状口縁の垂下部に一条の縦位方向に粘土紐を用いた蛇行文であり、粘土紐の上面に撚糸圧痕を施文している。下方の末端は丸みのもつものであり、口縁部文様帯に施文している (79)。円筒上層 c 式は、口縁部文様帯の区画の下位に蛇行文の粘土紐を貼りつけている。前段階と同様に末端は丸みを持つものである (77)。円筒上層 d 式は、波状口縁の垂下部に粘土紐 (素文) を羽状縄文の地文地に貼りつけている (80)。円筒上層 e 式は、粘土紐 (素文) を波状口縁の垂下部に貼りつけており、(81)は胴部の地文縄文地に蛇行の沈線文を施文している。

6 まとめ

遺跡に見る比率と量

装飾土器をグラフ(表3)で表した(注6)。全体比率でみると顔面→蛇→人体文→足という順であり、この比率は両遺跡とも変わらないものである。

(表4)は出土量を表したが、富ノ沢(2)遺跡の出土量が多い。富ノ沢(2)遺跡では総出土量が約 1,000

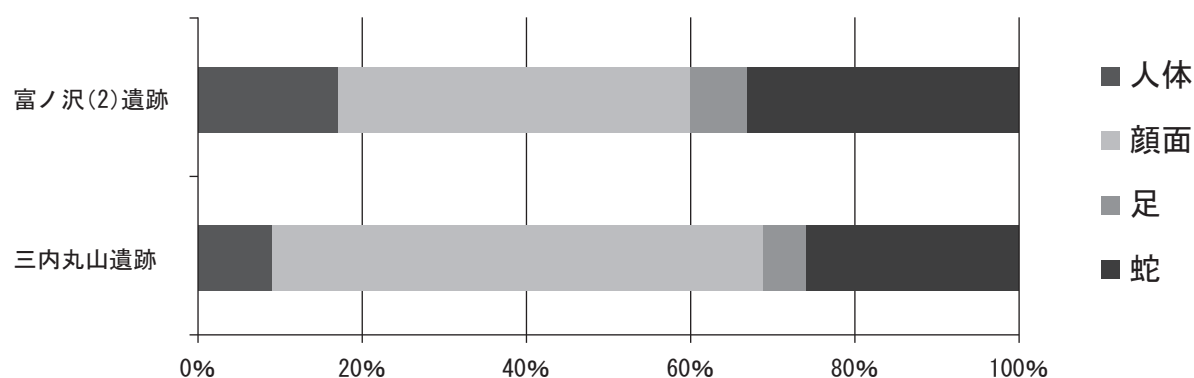


表3 装飾土器の割合

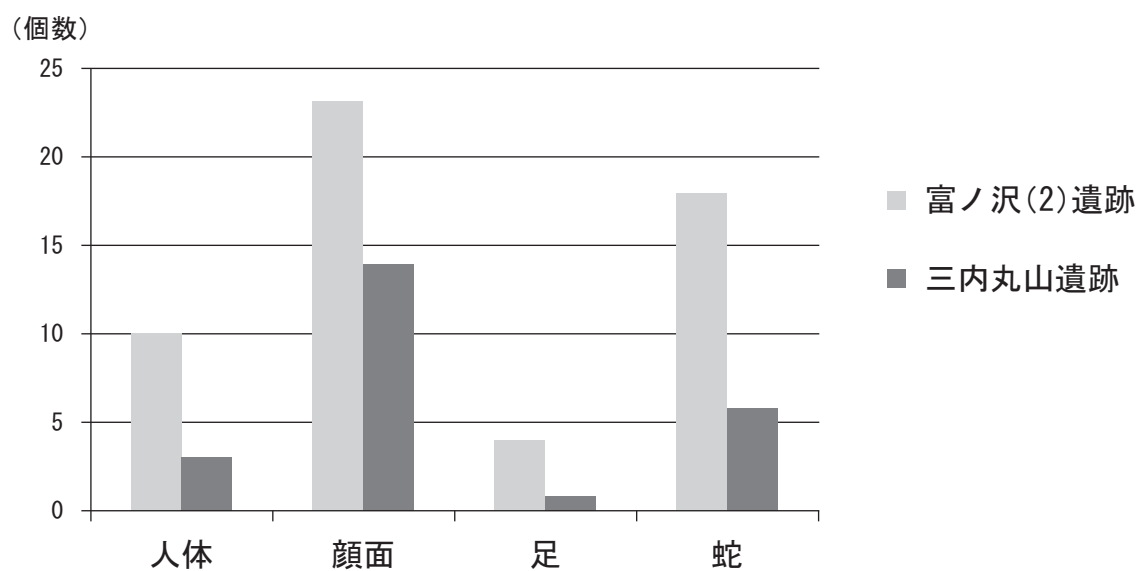


表4 装飾土器の個数

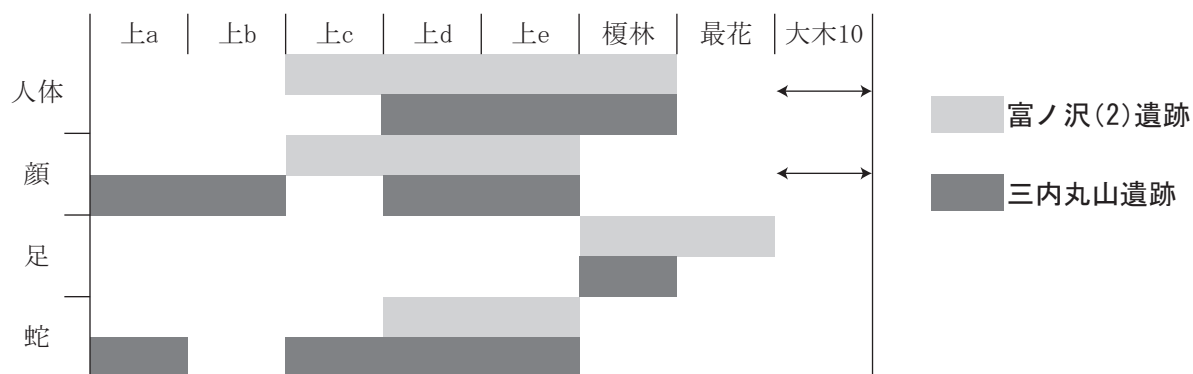


表5 装飾土器の時期

箱の出土で、三内丸山遺跡では総出土量が約 20,000 箱で約 20 倍の差がありながら、現段階（注 7）では装飾土器が富ノ沢(2)遺跡で多い事が指摘できる。

使用時期とまとめ（表 5）

両遺跡から出土している縄文時代中期の時期は、富ノ沢(2)遺跡で円筒上層 c 式～大木 10 式併行期、三内丸山遺跡で円筒上層 a 式～大木 10 式併行期の時期の遺物が出土している。

人体文付土器について

富ノ沢(2)遺跡では、円筒上層 c 式～榎林式、三内丸山遺跡では円筒上層 d 式～榎林式の時期であり、中期末葉の大木 10 式併行期の餅ノ沢遺跡（青森県 2000）では、人体文付土器が出土し、その系譜は縄文時代後期に継続するものである。

岡村道雄氏（岡村 2000）が『…縄文人の最初の絵は人物であり、その後も人物を描き続けている。めったに偶像を表現しなかった縄文人が描いた人物は特別な人、つまりシャーマンと考えられる…』として、シャーマン説を述べているが、福田友之氏（福田 1988）も石神遺跡の土器片を用いて、その人物はシャーマンであるとしている。シャーマンとして断定するのは一つの説としてあげるのはいいが、これが一人歩きする危険性もあり検証が必要であろう。また、縄文時代後期の八戸市葦窪遺跡（1984）から出土した狩猟文土器と呼称されている土器などは、当初から狩猟あるきと考えているのはいかがなものであろうか。筆者は狩猟の物語文様でなく、男女の抽象化した対構造をゆうする土器であると考えているが検証が必要であろう。

顔面付土器について

富ノ沢(2)遺跡では、円筒上層 c 式～円筒上層 e 式、三内丸山遺跡では円筒上層 c 式が欠落しているものの円筒上層 e 式まであり、粘土紐を用いる段階から顔面付土器が製作されている。また、大木 10 式併行期の弥栄平(2)遺跡（青森県 1984）で出土している。なお顔面付土器は、土器の口縁突起部に限定され、内面に付けられるものが少なく、表面のみが主体を占めて変容のない保守的な製作を有する。なお、渡辺誠氏の顔面付土器の研究が群を抜いている。落葉広葉樹林帯に存在し（渡辺 2000）この地域内で精神文化が向上した指摘や山梨県から出土した 168 点の出土遺物の分析をおこなったところ、地域的に 9 群に分類され、その中で甲府盆地から八ヶ岳東南麓にかけての地域が重要であると記載しているなど、マクロ・ミクロ的な観点から様相差を提示したことは重要であり、本県の顔面付土器研究にも影響を与えるものと考えられる。用途に関しては、渡辺誠氏は『…豊かな収穫を与えてくれることを祈るためのものであった…』（渡辺 1989）豊穰祈願の道具であったとしているが、その後『…女神がその身体を焼かれる事などによって死に新しい生命の誕生を願う『死と再生』の神話の存在が見えてくる…』（渡辺 2004）と死と再生観念及び日本神話からの理解へと変容している。一方、末木健氏は『…深鉢形土器の中で考えられる食料へ毒や細菌、腐敗菌即ち人間に害するものが入り込まないように、それらの目に見えない害なるものを撃退・排除する「僻邪」の意識がもたらされた…』（末木 2009）と土器には僻邪の意識が存在していたと記載している。中部地方の顔面付土器と本地域での顔面付土器の顔面のつくりは、相違するものの用途に関しては同一意識であったと考えられる。

足形付土器

富ノ沢(2)遺跡では、榎林式～最花式、三内丸山遺跡では榎林式と中期後葉の限られた時期から出土している。主体の時期は榎林式であり、東北地方南半部の大木 8 b 式の影響を強く受けた時期であ

る。渡辺誠氏（渡辺 2000）は東北地方南半部にみられると記載しており、土器文様とともに東北地方北半部に足形付土器も波及したものと考えられる。ただ出土量が極端に少なく広範囲に広まったものではないと考えられる。用途に関しては渡辺誠氏が土器を女性に見立て『…女性の身体から食べ物が出てくることを、より直接に示している…』として日本神話に基づいた解釈をおこなっている。

蛇付土器について

富ノ沢(2)遺跡では、円筒上層 d・e 式であり、三内丸山遺跡では円筒上層 b 式が欠落するものの、円筒上層 a 式から e 式の期間である。両遺跡ともに中期中葉期の円筒上層 d・e 式に盛行し、榎林式に消滅する。蛇を用いることに関しては藤沼邦彦氏（藤沼 1991）の『…ときおり脱皮する姿は再生や復活の観念に結びつけられる…』とか春成秀爾氏（春成 1997）の『…カエルを飲み込むマムシは、いかにも土の中に住む土の主、土の精霊です…』として、縄文時代という世界で蛇に対する畏怖を強調したものと思われる。当該地域では、研究史でもふれたが野口義麿（野口 1974）が提示した蛇が研究対象にならなかったのは、

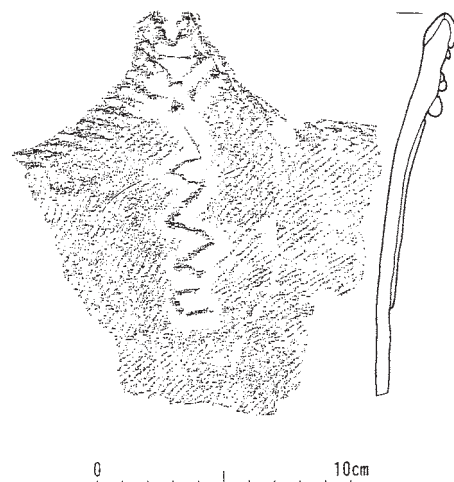
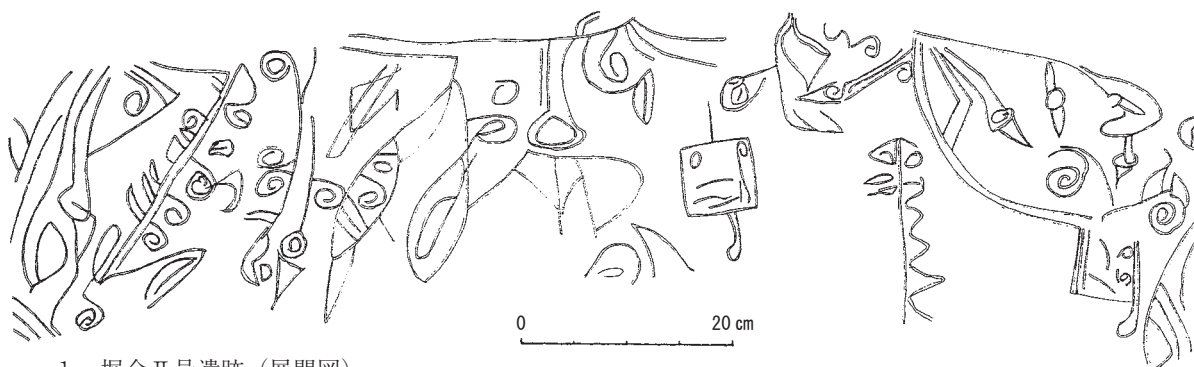
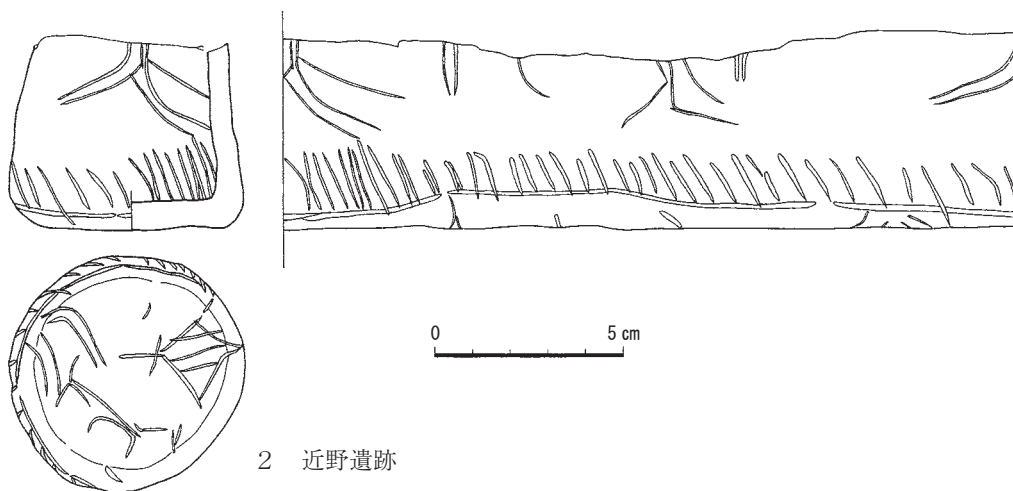


図 11 近野遺跡蛇付土器
(女神が蛇を食う図)



1 堀合Ⅱ号遺跡（展開図）



2 近野遺跡

図 12 絵画土器

その容姿が頭及び尾が明確ではなく、単なるクネクネした土器文様の一部であると考えている研究者が多い。筆者は近野遺跡（青森県 2005）の第 30 号住居跡から出土した（図 11）などは女神が蛇を食らう状態を表しているのではないかと考えられる良好な資料と考えている。また、三内丸山遺跡で出土した大形土偶の頭頂部にみられる蛇行文も筆者は蛇として理解し、円筒土器文化圏の中では蛇信仰が広まったものと考えられる。

最後に平川市（旧平賀町）の堀合Ⅱ号遺跡から出土した（図 12 - 1）の土器について記載する。小山彦逸氏（小山 1988）は、この土器について絵画であり描かれているものは、人体・亀・樹林等と分析しており、村越潔氏（村越 2003）も小山説に賛同しているが土器文様と別個の文様を描くことは近野遺跡（青森県 2005）の文様（図 12 - 2）も動・植物を描いたのか不明な土器である。縄文人にとって文様はメッセージを含んだ文様と思われるが、いまだ筆者は絵画として理解できないものである（注 8）。なお、芹沢長介氏はこのような抽象的な表現に対して『…農業の発生を基盤とした絵画が、このように抽象性をおびているという事実である。これは大自然の法則を意識的に人間が克服しはじめた。その抽象的な思考力の反映が、絵画の世界にまでもちこまれたからである…』（芹沢 1960）として縄文時代を抽象化の世界であると提示した。

7 おわりに

縄文時代中期の土偶は、三内丸山遺跡では土偶が大量に出土しており、円筒土器文化圏では土偶が多く製作されるイメージを持つが、富ノ沢(2)遺跡では 11 個の土偶しか出土していない。このことは、土偶の出土量から三内丸山遺跡の優劣を導くものではなく、地域的な観点も検証が必要であり、前段階の縄文時代前期にみられる奥羽山脈を境にした日本海岸の岩偶出土分布（図 13）は、明らかに地域的な差を顕著に表しており、中期段階においても変容しない現象で、地域的な要因とそれに伴う伝統の継承との差と理解すべきである。この現象は縄文時代後期の三角形岩版の出土分布にもみられるものである。

つまり、縄文時代の祭祀行為に使用する粘土を用いた遺物には、人形を媒体とした遺物（土偶）と、土器を媒体とした遺物（人体文付土器・顔面付土器・足形付土器・蛇付土器）があり、使用時期を概観すると人体文付土器・顔面付土器・蛇付土器については中期中葉期の円筒上層 d・e 式に多く製作され、榎林式期に至って顔面付土器及び蛇付土器が途切れ、足形付土器が製作される。その使用にあたっては遺跡間での使用に差があり、三内丸山遺跡の八甲田山麓エリアでは土偶を多く製作し、富ノ沢(2)遺跡の太平洋岸では装飾土器が多く製作されていた。このことは、土偶の製作及び使用が奥羽山脈を境とした地域的な伝統が存在していたと考えられる。

注

(1)三内丸山遺跡の 2,005 点という土偶の数値は、2011 年 7 月に三内丸山遺跡時遊館で企画された説

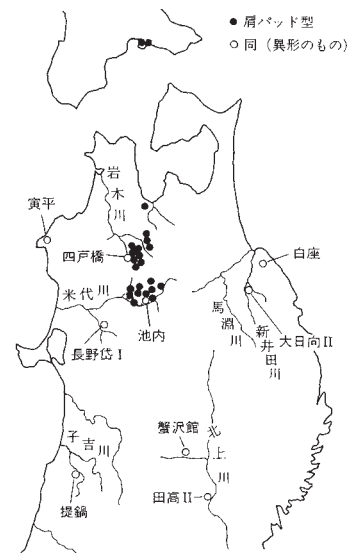


図 13 肩パット型岩偶分布図
稲野裕介(1999)図引用

明版に三内丸山遺跡の土偶数は 2,005 点と記載されていたので、その数値を使用した。現在も整理中とのことなので、その数値は変化すると考えられる。

- (2)拠点型集落を、遺構の種類及び捨て場を有し、大量の遺物を有する事と、継続した土器型式（5～6 型式）を有する集落を拠点型集落と理解しており、県内では他に つがる市石神遺跡・むつ市最花貝塚・七戸町二ツ森貝塚等が拠点型集落に該当すると思われる。
- (3)今回の祭祀遺物の中における土器に付けられた文様を装飾土器と統一し表現することとする。
- (4)土偶付土器と理解するのは、筆者は土偶そのものを土器に付着しているものを土偶付土器と認定するものであり、現段階では人体文付土器と理解したい。
- (5)今回の論考では、原則として縦位方向を蛇として定義したが、三内丸山遺跡出土の大形土偶の頭頂部の表現などは、蛇として筆者は認識しており、今後は蛇行文を更に詳細に検証する必要がある。
- (6)装飾時の点数は、報告書中に記載された図を基に各装飾土器毎に集計している。
- (7)三内丸山遺跡は、未だに整理中であり、現段階の報告を基に記載した。
- (8)図 12－2 の絵画土器は、近野遺跡の第 30 号住居跡から出土し前記で記載した蛇を食らう女神と同一の住居内から出土している。

引用・参考文献

〈富ノ沢(2)遺跡関係文献〉

- 青森県教育委員会（1989）『富ノ沢(1)・(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 118 集
- 青森県教育委員会（1992）『富ノ沢(2)遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 143 集
- 青森県教育委員会（1993）『富ノ沢(2)遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 147 集

〈三内丸山遺跡関係文献〉

- 青森県教育委員会（1994）『三内丸山(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 157 集
- 青森県教育委員会（1995）『三内丸山(2)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 185 集
- 青森県教育委員会（1996）『三内丸山遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 205 集
- 青森県教育委員会（1998）『三内丸山遺跡Ⅹ（第 1 分冊・第 2 分冊・第 3 分冊）』青森県埋蔵文化財調査報告書第 205 集
- 青森県教育委員会（2000）『三内丸山遺跡ⅩⅤ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 283 集
- 青森県教育委員会（2004）『三内丸山遺跡 24』青森県埋蔵文化財調査報告書第 382 集
- 青森県教育委員会（2004）『三内丸山遺跡 25』青森県埋蔵文化財調査報告書第 383 集
- 青森県教育委員会（2007）『三内丸山遺跡 31』青森県埋蔵文化財調査報告書第 443 集
- 青森県教育委員会（2008）『三内丸山遺跡 34』青森県埋蔵文化財調査報告書第 463 集
- 青森県教育委員会（2009）『三内丸山遺跡 35』青森県埋蔵文化財調査報告書第 478 集

〈その他の文献〉

- 青森県教育委員会（1978）『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 41 集
- 青森県教育委員会（1984）『弥栄平遺跡(2)発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 81 集
- 青森県教育委員会（1984）『葦窪遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 84 集

- 青森県教育委員会（2000）『餅ノ沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 278 集
- 青森県教育委員会（2005）『近野遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 394 集
- 稲野裕介（1999）「円筒土器に伴う岩偶(3)－分布の南辺における肩パット型岩偶の様相－」『北上市立埋蔵文化財センター紀要』第 1 号 北上市立埋蔵文化財センター
- 江坂輝弥（1960）『土偶』校倉書房
- 岡村道雄（2000）『日本列島の石器時代』青木書店
- 小山彦逸（1980）「縄文時代の絵画について」『青森県考古学』第 4 号 青森県考古学会
- 御所野縄文博物館（2010）『描かれた縄文人展 図録』
- 斎野裕彦（2006）「狩猟文土器と人体文」『原始絵画の研究論考編』六一書房
- 末木健（2009）「縄文時代の動物・人体文様を解く－豊穰と僻邪の祈り－」『山梨県考古学論集』
山梨県考古学協会
- 芹沢長介（1960）『石器時代の日本』築地書館
- 成田滋彦（1991）「青森県の顔面付土器－縄文時代中期を中心に－」『青森県考古学』第 6 号
青森県考古学会
- 野口義麿（1974）「蛇身装飾の分布と背景」『土偶芸術と信仰』講談社
- 春成秀爾（1997）「第一章 絵のはじまり」『原始絵画』講談社
- 平山久夫・佐藤時男（1991）「石神遺跡出土土器と土偶理解のために」『北奥古代文化』第 21 号
北奥古代文化研究会
- 平山久夫（1997）「円筒土器に於ける人面土器の研究」『北奥古代文化』第 26 号
北奥古代文化研究会
- 福田友之（1988）「縄文絵画」『青森県立郷土館だより』第 65 号 青森県立郷土館
- 福田友之（1989）「狩猟文土器考」『青森県立郷土館研究年報』第 13 号 青森県立郷土館
- 藤沼邦彦（1997）『縄文の土偶』講談社
- 村越潔（2003）「青森県における縄文の絵画と塑像」『考古学ジャーナル』NO 497 ニューサイエンス社
- 渡辺誠（1989）「神々の交合－mamushiとinoishiの造形」『縄文の神秘』学習研究社
- 渡辺誠（2000）「人面・土偶装飾付土器の体系」『季刊考古学』第 73 号 雄山閣出版社
- 渡辺誠（2004）「人面・土偶装飾付有孔鏢付土器の研究」『研究紀要』20 山梨県立博物館
- 渡辺誠（2006）「山梨県出土の人面・土偶装飾付深鉢形土器」『研究紀要』22 山梨県立博物館